

日本語映画の英語字幕に見られるポライトネス

牛江ゆき子 西尾道子

(文京学院大学) (お茶の水女子大学)

Translated movie subtitles must be short and concise while retaining the original meaning, because they are flashed across the screen only briefly. Because of this time limitation, expressions that are not directly related to the propositional meaning of the original lines such as those expressing politeness may be omitted or changed. Complementing our previous study (Ushie and Nishio (2009)), this paper explores, based on the framework of Brown and Levinson (1987), if politeness expressions in Japanese movies are changed in the English subtitles and, if changes are made, how they are changed. We argue that the politeness expressions in the original, Japanese, tend to reflect interpersonal distance or power relations but that in the English subtitles, they tend to reflect impositions of individual utterances although in the "mid-Distance" range there are some variations in Japanese politeness expressions.

1. はじめに

1.1 本稿の目的

字幕は映画の一つの画面が次の画面に変わるまでの間に一瞬現われて消える翻訳である。そのため翻訳が本来持つ特徴のほかに「瞬時性」とでもいうべきものに伴った特徴も併せ持っている。本来の翻訳のように、吟味した訳をスクリーンに提示しようにも、提示スペースが限られており、また瞬時に消えてしまうものであるのもとの言語(起点言語)の台詞に含まれる意味、ニュアンスのすべてを伝えきれているとは限らないであろう。起点言語の台詞の意味、つまり命題内容以外の要素には省略されるものがあるかもしれないと考え、牛江・西尾(2009)では1)丁寧さを表す表現が字幕で保持されているかどうか、2)字幕において丁寧さに関する表現が変更されている場合にはどのような変更がなされているのかについて、英語の映画の日本語字幕について検討した。

検討にあたっては丁寧さという概念をもっとも大きな枠組みで体系的に捉えたものとして、Brown and Levinson (1987) の枠組みを使用した。牛江・西尾 (2009) の繰り返しになるが、大雑把にまとめると、彼らは人が社会生活の中で持つ公の自己イメージを face と呼び、face

USHIE Yukiko and NISHIO Michiko, "Politeness in English Subtitles of Japanese Movies." *Interpreting and Translation Studies*, No.9, 2009. pages 253-272. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

には自分の自由・領分を侵されたくないという *negative face (wants)* と、逆に相手と仲間になりたい、相手に受け入れたいという *positive face (wants)* があるとしている。これらの *face* を脅かすものとして *Face Threatening Acts (FTA)* を想定し、*face* を脅かす度合いは話し手と聞き手の間の距離 *Distance (D)*、話し手と聞き手の間の力関係 *Power (P)*、話し手の発話内容が聞き手に対してどれくらい負担になるか *Rate of Imposition (Rx)* の総和として発話毎に計算されるとしている。さらに、*negative face wants* を守るためにとる言語行動を *negative politeness* とし、*positive face wants* を守るためにする言語行動を *positive politeness* としている。このように 2 種類のポライトネスを想定したことから表面的にはぞんざいに見える言語行動の中にも相手との連帯を求める *polite* な表現があるということになる。*Brown and Levinson* は、また、*negative politeness* も *positive politeness* もあらわさずに明示的に *FTA* を行う言語行動を *bald on record* と呼んでいる。*Bald on record* は、聞き手の *face* に配慮をしないで *FTA* を行う場合(緊急時で *face* への配慮よりも効率が優先される場合や、話し手が聞き手の *face* を脅かしてもよいと思う場合など)や、発話の内容が聞き手の利益になる場合に聞き手が遠慮しないようにあらかじめ配慮する際に選択されるとしている。

検討の結果、起点言語である英語のポライトネス表現は当該発話が相手に与えると考えられる負担を反映したものとなっているが、日本語の字幕においては、ポライトネス表現は基本的に話し相手との距離・力関係を反映したものになっていることが明らかになった。また、このような字幕表現上の変更が *Nida (1964)* の提案している *dynamic equivalence* の保持に結びついているのかどうかについても検討し、原文と字幕とで表現方法にずれがあっても英語と日本語それぞれにおいて自然なポライトネスのあらわされ方となっていると考えられるので、受け手への効果という点では等価である、つまり *dynamic equivalence* は保持されていると結論づけた。¹

本稿では日本語を起点言語とするポライトネス表現が英語字幕でどのように表現されるのかについて検討する。² 具体的には 1) 牛江・西尾 (2009) で明らかになった英語の映画の日本語字幕における特徴をいわば反転させたものが日本語映画の英語字幕に見られるのか、2) 日本語特有の言語的特性にもとづく独特の現象が見られるのか、3) *Nida (1964)* のいう *dynamic equivalence* は日本語映画の英語字幕においても保持されるのかという問題について考察する。

1.2 データと表記方法

本稿で考察する日本語映画の台詞の原文と英語字幕のデータは、英語字幕が英語の母語話者によって作成されている『ALWAYS 続・三丁目の夕日』(以下、『続・三丁目の夕日』と略記)、『Shall we ダンス?』の 2 本の映画の DVD から収集した。³ 日本語の台詞は、DVD の日本語字幕ないし音声を書き取った(日本語字幕と音声との間にずれがある場合には、音声を優先した)。英語字幕は、DVD の英語字幕から収集した。

例を挙げる際は、まず台詞の話し手が誰であるかを記し、次に台詞が向けられている相手(「聞き手」)が誰かを()に入れて記す。さらに、話し手と聞き手との関係を [] に入れて示す。次に、コロンのあとに日本語の台詞と英語字幕の表現を挙げる。最後に映画名と DVD

の時間表示を記す。字幕の表現を挙げる際、字幕が二枚以上にまたがっている場合は、「//」で次の字幕への移行をあらわす。

以下の議論において、日本語のオリジナルの台詞を「日本語の原文」または単に「原文」、英語字幕を「英語字幕」または単に「字幕」と呼ぶ。映画の中で本稿の議論の対象となる台詞を言っている登場人物を「話し手」、その台詞が向けられている登場人物を「聞き手」ないし「相手」と呼ぶ。

1.3 データの分析方法

データの分析は、基本的に Brown and Levinson において挙げられている negative politeness と positive politeness のストラテジーを参考にして行う。なお、英語の “please” について Brown and Levinson は、FTA を和らげる働きがあると述べているが、negative politeness と positive politeness のどちらにも分類をしていない。本稿においても、“please” の使用は negative politeness と positive politeness のどちらにも分類せず、別個に扱う(たとえば、“Please wait.” は “please” と分類する)。以下の 2 点については、Brown and Levinson とは異なる扱いをする。

a) 省略 (ellipsis)

文の要素の省略は、Brown and Levinson では、positive politeness をあらわすとされている(pp. 111-112)。しかし、日本語においては、もともと、文の要素が明示的に表現されないことが多い。文のもっとも主要な要素である動詞も、推論可能であれば省略される場合がある。それは、親しい仲間内の発話だけでなく、目上の人に対する発話においてもみられる(例えば、「どうぞこちらへ(いらしてください)」のような動詞および動詞に付く要素(以下、「動詞部分」)を省略した発話を目上の人に対して用いることが可能である)。動詞は尊敬語(例:「おっしゃる」)や謙譲語(例:「申し上げる」)であったり、尊敬や謙譲をあらわす接辞(「～される」(尊敬)、「～させていただく」(謙譲)など)をともなったりして、ポライトネスをあらわすので、動詞部分が省略されると動詞部分が担ったはずのポライトネスが表現されないことになる。そこで、日本語の原文において動詞部分が省略されている場合、positive politeness と negative politeness のどちらにも分類せず、「省略」として分類する。ただし、表現されている部分で negative politeness ないし positive politeness があらわされている場合は、「negative politeness + 省略」、「positive politeness + 省略」と分類する。

また、英語字幕において、省略は positive politeness をあらわすのではなく、字幕の字数制限による可能性がある。そこで、英語字幕においても、省略がみられる場合、一律に positive politeness とは分類せず、“Why not...?” のように親しい間柄で特徴的に用いられる省略表現のみを positive politeness として分類し、それ以外の省略表現は「省略」として分類する。

b) 理由を述べる (give reasons)

Brown and Levinson では、当該の FTA を行う理由を述べるのが positive politeness のストラテジーの 1 つに挙げられているが、本稿においては、データの分析・考察を単純化するた

めに、考察の対象とはしない。

2. 日本語映画の日本語の原文と英語字幕のポライトネス表現

牛江・西尾 (2009) で英語映画の英語の原文と日本語字幕のポライトネス表現を分析・考察した結果は、ほぼ表 1 のようにまとめることができる。

距離	大	中	小
力関係	話し手<聞き手	話し手=聞き手	話し手>聞き手
英語の原文のポライトネス表現	聞き手への負担に応じてさまざま	聞き手への負担に応じてさまざま	聞き手への負担に応じてさまざま
日本語字幕のポライトネス表現	聞き手への負担に関係なく negative politeness	聞き手への負担に関係なく bald on record、 positive politeness	聞き手への負担に関係なく bald on record、 positive politeness

表 1 英語映画の英語の原文と日本語字幕におけるポライトネスの表現

表 1 の結果が、もし日本語と英語のそれぞれのポライトネスの表現の原則を反映しているものであるならば、起点言語と着点言語が入れ替わった日本語映画の日本語の原文と英語字幕においては、表 1 を反転させた、表 2 のような現象が見られることが予測される。本節では、実際にこの予測にあう現象が見られるのかを考察する。⁴

距離	大	中	小
力関係	話し手<聞き手	話し手=聞き手	話し手>聞き手
日本語の原文のポライトネス表現	聞き手への負担に関係なく negative politeness	聞き手への負担に関係なく bald on record、 positive politeness	聞き手への負担に関係なく bald on record、 positive politeness
英語字幕のポライトネス表現	聞き手への負担に応じてさまざま	聞き手への負担に応じてさまざま	聞き手への負担に応じてさまざま

表 2 日本語映画の日本語の原文と英語字幕のポライトネスの表現の予測

牛江・西尾 (2009) においては、話し手と聞き手の距離と力関係のどちらが日本語字幕のポライトネス表現により重要な影響を持つのかというところまで詳しい考察は行わなかった。そこで、本節ではまず、話し手と聞き手の距離と力関係が日本語映画の日本語の原文におけるポライトネスのあらわされ方にどのように影響しているのかを考察する (2.1 節)。その上で、日本語の原文と英語字幕のポライトネス表現について、より詳しい分析・考察を行う (2.2-2.4 節)。

2.1 話し手と聞き手の距離と力関係と日本語の原文のポライトネス表現の関係

話し手と聞き手の距離と力関係を、表 1、表 2 にあるように、それぞれ「大・中・小」と「話し手 < 聞き手 (S < H)・話し手 = 聞き手 (S = H)・話し手 > 聞き手 (S > H)」の 3 種類ずつに分類すると、話し手と聞き手の関係は以下の 9 種類に分類することができる。

「距離大・S < H」「距離大・S = H」「距離大・S > H」

「距離中・S < H」「距離中・S = H」「距離中・S > H」

「距離小・S < H」「距離小・S = H」「距離小・S > H」

それぞれの種類ごとに日本語の原文でのポライトネスのあらわされ方を分析した結果、上記の 9 種類の関係はポライトネスのあらわされ方によって大きく次の 3 種類 (A~C) のいずれかに分類できることがわかった。

A 基本的に **negative politeness** があらわされる関係

B ポライトネスのあらわされ方が多様である関係

C 基本的に **positive politeness** があらわされるか **bald on record** となる関係

表 3 は、A、B、C に対応する話し手と聞き手との関係 (距離・力関係)、およびその具体例をしめしている。A、B、C は基本的には距離の「大、中、小」に対応するものであるが、話し手と聞き手の力関係によって、一部入れ替わっているところがある。話し手が聞き手よりも力関係が下である場合は、距離が実際は中位でも、大きいように感じられ、また、話し手が聞き手よりも力関係が上である場合は、距離が実際には大きくても、中位の場合と同じように意識されるものと思われる。この点については、3 節でさらに検討する。

関係	距離	力関係	例
A	大	S < H	初対面の店員→客、初対面のサービス提供者→サービスを受ける側 (探偵と探偵の依頼人など)
	大	S = H	初対面の同輩 (パーティーで会った初対面の者同士など)
	中	S < H	部下→上司、生徒→先生、社会的地位下位→上位 (大会社の社長など)
B	大	S > H	初対面の先生→生徒、初対面の親代わり→子供
	中	S = H	友人、同僚
	中	S > H	先生→生徒、社会的地位上位 (大会社の社長など)→下位
C	小	S < H	子→親、とても親しい関係の生徒→先生、とても親しい関係の部下→上司
	小	S = H	とても親しい友人
	小	S > H	親→子

表 3 日本語の原文のポライトネスのあらわされ方に基づく話し手と聞き手の関係の分類

以下、2.2 節、2.3 節、2.4 節で、A、B、C それぞれの関係ごとに、原文と字幕でのポライトネスのあらわされ方を見ていく。なお、以下の議論においては、便宜的に、関係 A、関係 B、

関係 C はそれぞれ、表 2 の「距離大」、「距離中」、「距離小」に対応するものと考え、結果が表 2 の予測にあっているかどうかを判断することとする。

2.2 関係 A(「距離大・S<H」、「距離大・S=H」、「距離中・S<H」)

話し手と聞き手の距離がかなり遠い場合(「距離大・S<H」、「距離大・S=H」あるいは「距離中・S<H」の場合)、原文ではほとんどの場合に *negative politeness* があらわされている(具体的には、*negative politeness* のみがあらわされる場合と、*negative politeness* に加えて *positive politeness* もあらわされる場合や省略もみられる場合がある)⁵。一方、字幕では、*negative politeness*、*positive politeness*、“please” の使用、*bald on record*、省略などさまざまなポライトネス表現が見られる。以下、典型的なポライトネス表現の例を、原文と字幕のポライトネス表現の種類別に挙げたのち、原文と字幕でのポライトネスのあらわされ方がどのような要因によって決まるのかを考察する。

a) *negative politeness* → *negative politeness*

(1) ホテルのドアマン(茶川に)[距離大・S<H]:

失礼ですが 招待状 拝見させていただいてよろしいですか？

Excuse me, but may I see your invitation? (『続・三丁目の夕日』40:54)

(1) では、ホテルのドアマンが身なりの貧しい茶川を怪しみ、同窓会の招待状の提示を求めている。原文は、「失礼ですが」と謝り、「拝見させていただいてよろしいでしょうか」という謙譲語や丁寧語を用いた疑問文で、聞き手に敬意を示し、聞き手の意向を尊重している (*negative politeness*)。字幕も、“May I ...?” という丁寧な疑問文で聞き手に敬意を示しつつ招待状の提示を求めている (*negative politeness*)。

(2) ダンスパーティーの参加女性(杉山に)[距離大・S=H]:

あの・・・ よろしければ 踊っていただけませんか

Would you be so kind as to dance with me? (『Shall we ダンス?』35:35)

(2) では、ダンスパーティーで女性が初対面の杉山に、いっしょに踊ってもらえないかと聞いている。原文は、「よろしければ」という表現や疑問文を用いて相手の意向を尊重し、さらに、「いただく」という尊敬語を用いている (*negative politeness*)。英語字幕は、“Would you be so kind as to...?” という仮定法を用いた疑問文で相手の意向を尊重している (*negative politeness*)。

(3) 青木(ダンス教室の生徒。杉山と同じ会社に勤務) → 杉山(ダンス教室の生徒。会社では青木の上司)[距離中・S<H]:

よかったら今度 僕が行っているダンスサークルのパーティーに来きませんか？

You could come to one of our dances. (『Shall we ダンス?』34:30)

(3) では、ダンス教室の先輩の青木がダンスを習い始めたばかりの杉山を誘っている。青木と杉山は会社で同期であるが、杉山が上司である。日本語の台詞では疑問文と「よかったら」という表現で相手の意向を尊重している。英語字幕では、仮定法 “could” を用いて相手の意向を尊重している。

b) negative politeness → “please”

(4) 茶川(淳之介の父親に)[距離中・S<H]:

もう一度だけ チャンスを下さい

Please give me one more chance (『続・三丁目の夕日』55:38)

(4) では、預かっている淳之介の世話をきちんとするという約束を果たせなかったために、淳之介の父親から、淳之介を引き取ると言われた茶川が、もう一度チャンスをくれと頼んでいる。原文では、「もう一度」ではなく「もう一度だけ」と限定することで聞き手の負担の軽減が図られている (negative politeness)。字幕では “please” が用いられている。

c) negative politeness → positive politeness

(5) 六子(住み込みで働いている会社の社長と妻に)[距離中・S<H]:

社長さんと奥さんも よかったら 一緒にいかがですか?

Why don't you two join us? (『続・三丁目の夕日』02:15:30)

(5) では、鈴木オートの息子の一平に東京タワーに行こうと声をかけた六子が、社長と妻も誘っている。原文は、「よかったら」という条件をつけ、さらに疑問文にして、聞き手の意向を尊重している (negative politeness)。字幕では、“Why don't you...?” という positive politeness の表現が用いられている。

d) negative politeness + 省略 → bald on record

(6) 探偵(探偵の依頼に訪れた杉山の妻に)[距離大・S<H]:

ご主人にそれとなくお尋ねになったことは?

Did you think of asking him? (『Shall we ダンス?』38:52)

(6) は、夫のことで探偵に相談にきた妻に探偵が聞いた質問である。原文では聞き手の夫が「ご主人」という敬称で言及され、「お尋ねになる」という尊敬語が用いられている (negative politeness) 上に、動詞部分が省略されている。字幕は単純な命令文である (bald on

record)。

e) negative politeness → bald on record

(7) ダンス教室の先生(ダンス教室を訪れた杉山に)[距離大・S<H]:

レッスンを希望の方ですか？

You want dance lessons? (『Shall we ダンス?』12:40)

(7) では、ダンス教室の先生が、ダンス教室を初めて訪れた杉山に訪問の理由を尋ねている。台詞では「ご希望」という尊敬語と「方」という敬称が用いられている (negative politeness)。字幕は平叙文による質問となっており、ポライトネスはあらわされていない(bald on record)。

(8) 青木(同じダンス教室の生徒であり、かつ勤務する会社で同期だが上司にあたる杉山に)[距離中・S<H]:

ダンスホールはもう行かれました？

Have you been to a dance hall? (『Shall we ダンス?』54:37)

(8) では、台詞では「行く」の尊敬語である「行かれる」という表現が用いられている (negative politeness) が、字幕は普通の疑問文で、ポライトネスをあらわす表現はない(bald on record)。日本語では、上下関係を反映して、negative politeness があらわされている。しかし、この発話の内容は単に相手の経験について質問をしているだけで、聞き手への負担は小さいので、英語ではポライトネスはあらわされていない。

f) negative politeness → 省略

(9) 初対面のダンス用品店の店員(客に)[距離大・S<H]:

シューズをお探しですか？

Looking for shoes? (『Shall we ダンス?』15:51)

(9) の原文では、「探す」に「お」がついて聞き手に敬意があらわされている (negative politeness)。字幕は、主語と be 動詞が省略された省略文となっている。

[2.2 節の考察]

話し手と聞き手との距離がかなり遠い場合、原文では、聞き手への負担の大きさに関係なく negative politeness があらわされている。これは、原文でのポライトネスのあらわされ方が、話し手と聞き手との関係によって固定化されていることを示している。一方、英語字幕でのポライトネスのあらわされ方は、聞き手にとっての負担の大きさによって異なっている。聞き手への負担が大きい場合(たとえば、相手の言葉を信じずに招待状の提示を求める、ダンスのパートナー

になってもらう、出かけるところがあるので急いで辞去しようとしている客を引き留める、約束した子供の引き渡しを待ってもらうなどの場合)は、**negative politeness** があらわされたり、“please” が用いられたりしている。聞き手への負担が比較的小さい場合(たとえば、相手が望むと思われることの誘いや、いつかパーティーに行こうというあいまいな誘いなど)は **positive politeness** や省略となっている。聞き手にとって負担がほとんどない場合(簡単な質問に答えてもらうなど)は **bald on record** となっている。したがって、英語字幕のポライトネス表現は聞き手への負担の大きさを反映していると言える。

まとめると、話し手と聞き手との距離がかなり遠い場合、日本語の原文では聞き手への負担の大きさに関係なく **negative politeness** があらわされ、英語字幕では聞き手への負担の大きさに応じて異なるポライトネス表現が用いられている。原文と字幕ともに、表 2 の予測のとおりとなっている。

2.3 関係 B(「距離大・S>H」、「距離中・S=H」、「距離中・S>H」)

話し手と聞き手の距離が中位である場合(「距離大・S>H」、「距離中・S=H」、「距離中・S>H」の場合)、原文では、ポライトネスのあらわされ方は多様であり、**negative politeness**、**positive politeness**、**bald on record** などさまざまな場合がみられる。字幕においても **negative politeness**、**positive politeness**、**bald on record**、“please” の使用などさまざまな場合がみられる。以下、典型的な例を挙げたのち、原文と字幕、それぞれにおいて、どのような要因によってポライトネスのあらわされ方が決まっているのかを考察する。

a) negative politeness + 省略 → negative politeness

(10) ダンス教室の先生(生徒の杉山に)[距離中・S>H]:

あのう申し訳ないんですけど 教室の外で生徒さんと個人的にご一緒するのは
どうも

I'm sorry. // I prefer not to have private contact with students. (『Shall we ダンス?』47:22)

(10) では、ダンス教室の先生が、杉山の食事の誘いを断っている。原文では、「申し訳ないんですけど」という謝罪の表現と「ご一緒する」という敬語が用いられ (**negative politeness**)、「どうも」の後が省略されている。字幕では“I'm sorry.”という謝罪の表現が用いられている。

b) negative politeness → positive politeness

(11) たま子先生(ダンス教室の生徒の高橋豊子に)[距離中・S>H]:

豊子さん ラテンは青木さんと組んで踊ってもらえるかしら

What about trying Mr. Aoki, for the Latin program? (『Shall we ダンス?』01:18:42)

(11) の原文は、「かしら」という終助詞を用いて相手に問いかけて相手の意向を尊重する (negative politeness)。英語字幕の “What about...?” は省略をともなう positive politeness の表現である。

c) negative politeness + positive politeness → negative politeness

(12) たま子先生(ダンス教室の年下の同僚に)[距離中・S>H] :

だったら 悪いんだけど 杉山さん ちょっと見てあげてくれる?

Would you mind taking Mr. Sugiyama? (『Shall we ダンス?』 01:20:25)

(12) では、原文と字幕ともに疑問文による依頼となっている (negative politeness)。さらに、原文は「悪いんだけど」と謝り、「ちょっと」で負担を軽減している (negative politeness)。また、原文では親しい間柄や力関係が下の人への依頼に使われる「・・・してくれる?」という表現が用いられている (positive politeness)。英語字幕では仮定法が用いられている (negative politeness)。

(13) たま子先生(ダンス教室の年下の同僚に)[距離中・S>H] :

舞ちゃん この人達 大会まで 私と一緒に見てあげてくれない?

Would you consider tutoring them for the competition? (『Shall we ダンス?』 01:24:12)

(13) では、原文と字幕ともに疑問文による依頼となっている (negative politeness)。原文では親しい間柄や力関係が下の人への依頼に使われる「・・・してくれない?」という表現が用いられている (positive politeness) が、字幕では仮定法を用いた依頼表現となっている (negative politeness)。

d) positive politeness → positive politeness

(14) たま子先生(ダンス教室の生徒の杉山に)[距離中・S>H]:

杉山さん 豊子さんが元気になったら 彼女と組んで大会に出てみようよ

Why don't you be Toyoko's partner? (『Shall we ダンス?』1:12:46)

(14) はダンス教室の生徒の杉山に、もう一人の生徒の豊子とペアを組んで大会に出ることを提案している。原文では「・・・てみよう」という話し手自身も行為者に含まれるような表現になっており、親しい間柄での依頼や勧誘に使われる終助詞「よ」が用いられている (positive politeness)。英語字幕では、“Why don't you...?” という positive politeness の表現を用いている。

(15) 服部(ダンス教室仲間の杉山に)[距離中・S=H]:

がんばりましょう

Give it our best shot! (『Shall we ダンス?』22:58)

(15) では、ダンスのステップがうまくできない杉山を励ますのに、台詞も字幕も、話し手を含む一人称の命令文を用いている (positive politeness)。

e) positive politeness → bald on record

(16) トモエ(家で預かることになった親戚の女の子に)[距離大・S>H]:

美加ちゃん おばさんのこと おかあさんだと思って 何でも言ってね

Mika, think of me as your mother and tell me anything. (『続・三丁目の夕日』15:07)

(16) では、トモエが、初対面の美加に、安心させようと言葉をかけている。原文では終助詞「ね」が用いられている (positive politeness)。字幕は、単純な命令文となっている (bald on record)。

(17) たま子先生(ダンス教室の生徒たちに)[距離中・S>H]:

さあ やってみましょう

Now you try. (『Shall we ダンス?』21:40)

(17) では、たま子先生がステップの手本を見せた後、生徒たちにやってみろといっている。原文では話し手も含む一人称の命令文となっている (positive politeness) が、字幕では単純な二人称の命令文になっている(bald on record)。

f) bald on record → positive politeness

(18) たま子先生(ダンス教室の生徒の杉山に)[距離中・S>H]:

杉山さん 豊子さんと踊ってみて

Now let's try it with Toyoko. (『Shall we ダンス?』01:22:58)

(18) では、原文は単純な二人称の命令文である (bald on record)が、字幕は話し手も含む一人称の命令文となっている (positive politeness)。

g) bald on record → bald on record

(19) たま子先生(ダンス教室の生徒の杉山に)[距離中・S>H]:

杉山さん 顔あげて

Mr. Sugiyama, look up. (『Shall we ダンス?』26:45)

(19) は、ダンスの指導で指示をしているところである。原文と字幕ともに単純な二人称の命令文となっている (bald on record)。

h) 省略 → bald on record

(20) たま子先生(ダンス教室の生徒たちに)[距離中・S>H]:

そっちがリーダー

You two will lead. (『Shall we ダンス?』20:34)

(20) は、二人の男性生徒たちにリードするのは男性の役目と教えているところである。原文は動詞が省略されている。字幕の “You will ...” は二人称の命令文と同様のストレートな指示である (bald on record)。

[2.3 節の考察]

話し手と聞き手との距離が中位の場合、原文のポライトネスのあらわされ方は、聞き手への負担に応じて異なっている。基本的に、聞き手にとって負担が大きい場合(食事の誘いを断ったり、長期に渡る指導を引き受けるなど)に *negative politeness* ないし *negative politeness* + *positive politeness* となっており、聞き手への負担が大きくなかったり、聞き手が当然行すべきことを指示していたり、聞き手のためを思ってこうしたらと言っている場合に *positive politeness* や *bald on record* となっている。字幕のポライトネスのあらわされ方も、原文と大きく異なっておらず、原文と同じ原則が働いているように思われる。ただし、原文と字幕を比較すると、原文であらわされている *positive politeness* が字幕ではあらわされない場合(具体的には、原文が *negative politeness* + *positive politeness* であるのに字幕は *negative politeness* のみとなる場合や、原文では *positive politeness* があらわされているにもかかわらず字幕は *bald on record* となる場合)が目立つ。これは、日本語と英語のポライトネスのあらわされ方の原則の差というより、日本語と英語の表現に特有の性質によるものと思われる。この点については、3 節で論じる。

まとめると、話し手と聞き手との距離が中位の場合、日本語の原文と英語字幕ともに、ポライトネス表現は聞き手への負担の大きさに応じて異なっている。表 2 の予測と比較すると、原文のポライトネスのあらわされ方は表 2 の予測とは異なっており、字幕でのポライトネスのあらわされ方のみ予測どおりである。

2.4 関係 C(「距離小・S<H」、「距離小・S=H」、「距離小・S>H」)

話し手と聞き手との関係がとても近い場合、原文においては、*positive politeness* があらわさ

れている場合と bald on record の場合がほとんどである。一方、字幕においては、bald on record の場合がもっとも多く、positive politeness があらわされている場合は限られている。以下、典型的な例を挙げたうえで、原文と字幕において、ポライトネス表現の選択はどのような要因によって決まるのかを考察する。

a) positive politeness → positive politeness

(21) 高橋(ダンス教室の先生に)[距離小・S<H]:

もう 先生・・・ ちょっと休憩しよう

Let's take a break. (『Shall we ダンス?』01:27:01)

(21) では、ダンスを教えてもらっている生徒が、長時間の練習で疲れたので、少し休憩をしようと提案している場面である。休憩したいのは話し手であるが、原文と字幕ともに、一人称複数形の命令文が用いられ、休憩をとる中に聞き手も含まれている (positive politeness)。

(22) 一平(父親に)[距離小・S<H]:

逃げちゃダメだよ お父ちゃん

Daddy, don't run away. (『続・三丁目の夕日』02:15:34)

(22) は、東京タワーに行くのをためらう高所恐怖症の父親を息子がからかって言っている。原文では終助詞「よ」が用いられ、「お父ちゃん」という親しみが込められた呼称が用いられている (positive politeness)。字幕においても、“Daddy” という親しみが込められた呼称が用いられている (positive politeness)。

b) positive politeness → bald on record

(23) 一平(六子に)[距離小・S=H]:

教えてよー

Tell me (『続・三丁目の夕日』02:16:56)

(23) では、住み込み従業員の六子が幼なじみと指切りをしているのを見て、その家の息子が、何を約束したのか教えてくれと頼んでいる。原文では終助詞「よ」が用いられている (positive politeness) が、字幕は単純な命令文である (bald on record.)。

(24) トモエ(預かっている親戚の子供に)[距離小・S>H]:

全部やったら 2階に干して頂戴 陽の高いうちにやっちゃってね

When you've done the whole load, hang them. // Do it while the sun's high.

(『続・三丁目の夕日』30:19)

(24) では、洗濯物を絞って干すように頼んでいる。原文では「頂戴」と終助詞「ね」により親しみが込められている。字幕は単純な命令文である (bald on record.)。

(25) 一平の母(一平に)[距離小・S>H]:

晩ご飯までには帰って来なさいよ

Come home in time for supper (『続・三丁目の夕日』36:31)

(25) の原文では終助詞「よ」が用いられている (positive politeness) が、字幕は単純な命令文である (bald on record.)。

c) bald on record → bald on record

(26) 茶川(預かって育てている子供淳之介に)[距離小・S>H]:

あ 淳之介 あそこの葉書 ポストに入れといてくれ

Hey, Junnosuke, drop that postcard in the mailbox. (『続・三丁目の夕日』 29:01)

(26) では、父親代わりの話し手が子供に葉書の投函を頼んでいる。原文と字幕ともに、単純な命令文である (bald on record.)。

(27) 茶川(淳之介に)[距離小・S>H]:

座れ どういうことなんだ ちゃんと説明しろ

Sit. // What's going on? Explain it to me. (『続・三丁目の夕日』45:53)

(27) では、淳之介が給食費を先生に渡していないことがわかり、話し手が淳之介に説明を求めている。原文と字幕ともに、単純な命令文である (bald on record.)。

(28) 父親(娘の舞に)[距離小・S>H]:

個人レッスンの時間を調整して グループレッスンはお前が見てあげなさい

Reschedule your private lessons // and take tonight's group class. (『Shall we ダンス?』42:40)

(28) では、ダンス教師の一人が休むことになったので、ダンス教室校長である父親が、ダンス教師の娘に代わりを務めるように頼んでいる。原文と字幕ともに、単純な命令文である (bald on record.)。

[2.4 節の考察]

今回考察の対象としたデータにおいては、話し手と聞き手の関係がとても近い場合、聞き手

への負担の大きさを見ると、発話内容が聞き手の利益になるものである場合が多く、話し手にとって負担となる場合であっても大きな負担とならないものがほとんどであった。ポライトネス表現を見ると、原文においては、positive politeness があらわされている場合と bald on record の場合がほとんどであった。positive politeness があらわされるか、bald on record となるかは、聞き手への負担の大きさや話し手の便益になるかどうかということより、話し手と聞き手の関係により強く影響されているようであった。その理由は、聞き手の負担となる場合であっても、また、話し手の便益になる場合であっても、 $S < H$ と $S = H$ の場合には positive politeness があらわされる傾向が見られ(たとえば、(21)、(23)、(24))、 $S > H$ の場合には bald on record となる傾向が見られる(たとえば、(26)、(28))からである。聞き手への負担が大きい場合の例がなかったために断定はできないが、positive politeness があらわされるか bald on record となるかが話し手と聞き手との関係を反映していると考えられるため、原文におけるポライトネスのあらわれ方は、聞き手への負担の度合いよりも、話し手と聞き手の関係をより強く反映している可能性が高い。このように考えると、表 2 の予測どおりということになる。

一方、字幕においては、bald on record の場合がもっとも多く、positive politeness があらわされている場合は限られている。特に、 $S > H$ の場合は、bald on record がほとんどである。Positive politeness があらわされるのは、原文において positive politeness があらわされる場合で、(21) のように一人称複数の命令文が用いられている場合に“Let's...”という一人称複数の命令文が用いられる場合と、(22) のように呼称で親しみが示される場合のみである。原文であらわされている positive politeness が字幕ではあらわされないことがあるということになるが、これは、牛江・西尾 (2009) で見たように、英語では親しい間柄での負担がわずかな依頼や相手の利益になる助言や申し出においては、positive politeness と bald on record の両方が可能であることと、言語の特性として、日本語では positive politeness を終助詞「よ」や「ね」などによって少ない字数で簡単にあらわすことができるのに対し、英語ではできないことによると思われる(3節参照)。話し手と聞き手との関係が遠い場合と中位の場合に英語字幕のポライトネス表現は聞き手への負担の大きさを反映していたことから、話し手と聞き手との関係が近い場合も、聞き手への負担の度合いを反映して bald on record (ないし positive politeness) が選択されている可能性が高い。このように考えると、表 2 の予測どおりということになる。

3. 考察

本節では、2 節で示した結果と考察をもとに、1 節で挙げた 3 つの問題について検討する。

まず、日本語映画の英語字幕において、英語の映画の日本語字幕に見られた特徴をいわずに反転させた事象が見られるかどうかを検討する。話し手と聞き手の距離が遠い場合には予測どおり、日本語の原文ではポライトネス表現は基本的に話し相手との距離・力関係を反映したものになっているが、英語字幕では、当該発話が相手に与えると考えられる負担を反映したものとなっていることが明らかになった。距離が近い場合も、同様である可能性が高い(この点については、より大きなデータからの検証が必要である)。しかし、距離が中位の場合には、予測と異なり、英語字幕のみならず、日本語の原文のポライトネス表現も、発話が相手に与える

と考えられる負担を反映したものとなっていることがわかった。以上の結果はほぼ表 4 のようにまとめられる。

話し手と聞き手の関係	A (遠い)	B (中位)	C (近い)
話し手と聞き手の距離・力関係	距離大・S<H 距離大・S=H 距離中・S<H	距離大・S>H 距離中・S=H 距離中・S>H	距離小・S<H 距離小・S=H 距離小・S>H
日本語の原文のポライトネス表現の決まり方	話し手と聞き手の距離・力関係を反映	発話の内容の聞き手への負担を反映	話し手と聞き手の距離・力関係をおそらく反映
発話内容の聞き手への負担の大きさと日本語の原文で主に使用されているポライトネス表現	聞き手への負担に関係なく negative politeness	聞き手への負担に応じて さまざま	聞き手への負担はあまり大きくなく positive politeness (S<H, S=H)、 bald on record (S>H)
英語字幕のポライトネス表現の決まり方	発話の内容の聞き手への負担を反映	発話の内容の聞き手への負担を反映	発話の内容の聞き手への負担をおそらく反映
発話内容の聞き手への負担の大きさと英語字幕で主に使用されているポライトネス表現	聞き手への負担に応じて さまざま	聞き手への負担に応じて さまざま	聞き手への負担はあまり大きくなく bald on record、 positive politeness

表 4 日本語映画(2 作品)の日本語の原文と英語字幕のポライトネスの表現

距離が中位の場合、日本語の原文のポライトネスのあらわされ方が、予測とは異なって、多様であり、発話の内容の聞き手への負担の大きさを反映している。このことは、距離が中位の場合には、あまり親しくない場合からかなり親しい場合まで広い範囲が含まれ、しかも、話し手と聞き手の関係が固定的ではないことによると思われる。Wolfson は、社会的距離が非常に大きい場合と小さい場合は互いの関係がはっきりしていて互いに期待されることがわかっているのであいまいな言語行動をとる必要がないのに対し、社会的距離が中位の場合には、関係が流動的で不安定なので言語行動によって常に互いの関係を確認したり再定義したりする必要があるとしている(Wolfson 1988 in Holmes 1995: 13-14)。⁶ 距離が中位の場合には、話し手の聞き手に対する距離のとり方がそもそも多様であるとともに可変的でもあるので、話し手の距

離のとり方に応じてポライトネスの表現のしかたも多様となり、負担の大きさにあまり関係なく *positive politeness* や *bald on record* が選択される場合もあれば、負担の大きさに応じてポライトネスの表現が選択される場合もあるのではないと思われる。⁷

日本語(の文化)においては、話し手が聞き手よりも力関係が下の場合は、社会的距離が中位であっても、話し手には心理的に大きな隔たりがあると感じられ、しかも、その隔たりは固定的なものとしてとらえられやすい。そのため、ポライトネスの表現も固定的になりがちなのではないかと思われる。逆に、話し手が聞き手よりも力関係が上の場合には、実際の距離は大きくても(つまり初対面であっても)聞き手に対してどのような距離のとり方をするかが話し手の裁量にかなり任されるので、ポライトネスの表現のしかたも固定的ではなく多様になると考えられる。このような理由により、ポライトネスのあらわされ方にもとづいて話し手と聞き手の関係を分類した際に、「距離中・ $S < H$ 」が「距離大・ $S < H$ 」、「距離大・ $S = H$ 」とともに関係 A に分類され、「距離大・ $S > H$ 」が「距離中・ $S = H$ 」、「距離中・ $S > H$ 」とともに関係 B に分類される結果になったのではないかと思われる。

次に、日本語特有の言語的特性にもとづく独特の現象が見られるのかという2つ目の問題を検討する。2.3節と2.4節において、日本語の原文であらわされる *positive politeness* が英語字幕ではしばしばあらわされないことを見た。このことには、日本語の言語的特性がかかわっていると思われる。日本語では終助詞の「ね」や「よ」や動詞の接辞「(して)くれる」などによっていつでも容易に *positive politeness* をあらわすことができる。それに対し、そのような表現手段を持たない英語では、*positive politeness* をあらわすことは日本語ほど容易ではない。特に、字幕のように字数に制約がある場合に *positive politeness* をあらわすことは容易ではない。また、英語において、発話の内容が聞き手にとって負担が大きい場合に、*negative politeness* があらわされる必要はあるが、*negative politeness* と *positive politeness* の両方があらわされる必要性は薄い。さらに、牛江・西尾(2009)で見たように、発話の内容が聞き手にとって負担が大きい場合や聞き手の利益になる場合に *positive politeness* と *bald on record* のどちらも可能である。以上のような要因により、英語字幕においては原文であらわされている *positive politeness* がしばしば省略されると考えられる。

最後に、Nida(1964)のいう *dynamic equivalence* は日本語映画の英語字幕においても保持されるのかという問題について検討する。これまで見てきた結果と考察より、日本語の原文のポライトネスの表現は Matsumoto(1988)の日本語のポライトネスについての考察と基本的に合致し、英語字幕のポライトネスは Brown and Levinson(1987)のポライトネスの理論に合致していると言える。日本語と英語それぞれのポライトネスに関する一般的な特徴が日本語の原文と英語字幕のポライトネスの表現に反映しているということである。それぞれの言語において、話し手と聞き手の対人関係にとって自然なかたちでポライトネスがあらわされているという点で、原文と字幕のポライトネス表現は、それぞれに接する受け手にとって等しい効果を持つと考えられる。すなわち、原文と字幕とで、あらわされるポライトネスの種類は異なっても、Nida(1964)の言うところの *dynamic equivalence* (受け手への効果という内容上の等価性)は保持されていると言える。

4. まとめ

本稿では、英語映画の英語の原文と日本語字幕のポライトネス表現に関する牛江・西尾 (2009) の結果を受けて、起点言語と着点言語が入れ替わった日本語映画の日本語の原文と英語字幕のポライトネス表現の分析を行った。本稿と牛江・西尾 (2009) の結果を総合すると、分析対象とした日本語映画の英語字幕と英語映画の日本語字幕のどちらにおいても、原文と字幕との間で、あらわされるポライトネス自体は一致しない場合がある(たとえば、一方が *negative politeness* で一方が *positive politeness* である、あるいは一方が *bald on record* で一方が *negative politeness* である場合などがある)が、それぞれの言語におけるポライトネス表現の原則は基本的に守られていると言える。字幕翻訳という、時間的にも提示スペースの上でも大きな制約がある翻訳であっても、少なくとも、登場人物の人柄や登場人物間の対人関係が重要な意味を持つような映画(これと対比されるものとしては、事実報道に重点がおかれるドキュメンタリー映画やニュース番組がある)においてはポライトネス表現の原則は可能な限り守られるのではないかと思われる。⁸

原文と字幕のポライトネスの表現に関して Nida (1964) の *dynamic equivalence* という概念を適用するにあたり、本稿と牛江・西尾 (2009) においては、原文と字幕の台詞の一つ一つを対照して等価性を判断するのではなく、原文と字幕の表現がそれぞれの言語において一般的に働いていると考えられる原則を反映しているのかどうかという視点から判断した。ポライトネスのような、話し手や聞き手の対人関係や発話の状況など複数の要因が複雑に関与する側面に関して受け手への効果という内容的な等価性を判断するためには、用いられている表現自体を比較するだけではなく、起点言語と着点言語において一般的に見られる特徴や原則を考慮し、その表現がなぜ選択されているかまで含めて判断する必要がある。起点言語と着点言語において異なる原則がはたらいていれば、表現は異なっても、それぞれの言語での受け手への効果は等価である可能性がある(また、逆に、表現はほぼ同じであっても、受け手への効果は異なる可能性もある)ので、全体的な視点で捉えることが重要であると考えられる。

.....

【著者紹介】

牛江ゆき子 (USHIE Yukiko) 文京学院大学外国語学部教授。専門は英語学(テキスト言語学)。

主な論文に「定冠詞と不定冠詞の表出的機能について」『英語青年』第 150 巻/第 3 号 2004 年)など。連絡先: ushie@fs.u-bunkyo.ac.jp

西尾道子 (NISHIO Michiko) お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授。専門は

英語学(語用論)。主な論文に「日英同時通訳における情報構造の保持と通訳文の語順に関する一考察」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』第 53 巻 2000 年) など。

連絡先: nishio.michiko@ocha.ac.jp

【注】

1) Nida (1964) は、翻訳には、形式 (form) と内容 (content) の両面の等価性 (formal

equivalence) を重視する翻訳 (formal-equivalence translation) と、形式上の対応にはこだわらずに、受け手への効果という内容上の等価性 (dynamic equivalence) を重視する翻訳 (dynamic-equivalence translation) とがあるとしている。現実にとちらの等価性に比重をおいて翻訳するかは、翻訳されるものの種類や内容、翻訳の目的、対象とする読者の種類などさまざまな要因によって左右されるとしている。

- 2) 以下、positive politeness に基づいた表現をも考察の対象とするために、「丁寧さ」ではなく「ポライトネス」という表現を使用する。また、bald on record もポライトネスの表現の選択肢の一つとして扱い、考察の対象とする。

- 3) 本稿で分析の対象とするデータは以下の二つの日本語映画の DVD から収集した。

『ALWAYS 続・三丁目の夕日』[DVD] 山崎貴監督 バップ 2008 英語字幕 Linda Hoaglund

『Shall we ダンス?』[DVD] 周防正行監督 角川ヘラルド映画 2006 英語字幕 Kennedy Taylor and S.J. Walton

なお、上記の他にも3作品からデータを収集したが、英語字幕が英語母語話者によって制作されたものであるか確認できなかったために、確認ができた上記2作品のみを本稿の分析対象とした。

- 4) 起点言語 (source language) に対し、翻訳の訳文の言語 (target language) を牛江・西尾 (2009) および本稿では「着点言語」と呼んでいる。英語の “target language” という用語は、第二言語・外国語習得の分野においては、学習の対象となる第二言語ないし外国語をあらわし、日本語では「目標言語」と訳される。しかし、翻訳における訳文の言語をあらわす “target language” に対する日本語の定訳はないようである。そこで、牛江・西尾 (2009) および本稿では、便宜的に、起点言語 (source language) との対比を明示する「着点言語」という表現をあてることとした。

- 5) 例外的に、原文と字幕がともに bald on record となっている例がある。

(i) 近所の子供たち(淳之介の父親に)[距離大・S<H]:

帰れ 帰れ

Go home. Go home. (『続・三丁目の夕日』12:50)

(i) では淳之介を引き取りにあらわれた淳之介の父親の傲慢さと強引さに腹を立てた近所の子供達が淳之介の父親をはやして「帰れ」と言っている。原文でも字幕でも、単純な命令文が用いられている (bald on record)。この場合、聞き手の face がまったく考慮されないために bald on record が用いられているので、原文も字幕も bald on record となっている。

- 6) Wolfson は中間の社会的距離はもっとも気を遣う必要のある関係であり、ポライトネス(特に、positive politeness)がもっともあらわされると述べている (Wolfson 1988 in Holmes 1995: 13-14)。

- 7) 牛江・西尾 (2009) で分析した日本語字幕において、話し手と聞き手の社会的距離が中位 (距離が中、力関係が話し手=聞き手) の場合、聞き手への負担の大きさに関係なく bald on

record ないし positive politeness が用いられる傾向が見られたことにはいくつかの説明が考えられる。まず、多様なポライトネス表現の選択が可能な中で、字幕の字数上や時間的な制約が作用した(つまり、negative politeness をあらかず日本語表現より字数が少なくてすむ bald on record や positive politeness をあらかず日本語表現が一貫して選択された)可能性がある。また、登場人物の人柄や対人関係についての字幕制作担当者の解釈が字幕のポライトネス表現に反映した可能性もある。

- 8) 本稿を執筆後、牛江・西尾(2009) および本稿と同様に Brown and Levinson (1987) の枠組みを用いた映画の字幕翻訳の研究として Hatim and Mason (2000) および Gartzonika and Serban (2009) があることがわかった(指摘いただいた査読者にこの場を借りて感謝します)。Hatim and Mason (2000) はフランス映画一作品の英語字幕を分析対象とし、フランス語の原文であらわされているポライトネスが英語字幕においてはあらわされない傾向があることを指摘している。Gartzonika and Serban (2009) は、ギリシャ映画一作品の英語字幕を分析対象とし、ギリシャ語の原文と英語字幕とで、フェイスを脅かす度合いに一貫しないずれがある(両者が一致して高い場合もあれば、原文が字幕より低い場合、反対に、字幕が原文よりも低い場合もある)ことを指摘している。彼らは、そのずれの一部は、言語のスタイルは想定される聴衆に合わせてデザインされるという audience design という視点 (Bell 1984, 2001 in Gartzonika and Serban 2009) から説明できる可能性を指摘している。牛江・西尾 (2009) および本稿は、これらの先行研究と同様に原文と字幕のポライトネス表現にずれがあることを指摘するが、これらの研究とは異なり、ポライトネス表現のずれは、起点言語と着点言語でのポライトネスのあらわされ方の違いを反映するものであると捉え、原文と字幕とで、話し手と聞き手との対人関係において自然な表現が用いられている(その意味で、dynamic equivalence は保たれている)と主張する。

【参考文献】

- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gartzonika O. & Serban A. (2009). Greek soldiers on the screen: politeness, fluency and audience design in subtitling. In Diaz-Cintas, J. (Ed.). *New Trends in Audiovisual Translation*. Bristol: Multilingual Matters. 239-250.
- Hatim B. & Mason I. (2000). Politeness in screen translating. In Venuti, L. (Ed.). *The Translation Studies Reader*. London: Routledge. 430-445.
- Holmes, J. (1995). *Women, Men and Politeness*. London: Longman.
- Matsumoto, Y. (1988). Reexamination of the universality of face: politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics* 12, 403-426.
- Nida, E. A. (1964). *Toward a Science of Translating: With Special Reference to Principles and Procedures Involved in Bible Translating*. Leiden: E. J. Brill.
- 牛江ゆき子・西尾道子 (2009) 「英語映画の日本語字幕にみられるポライトネス」『翻訳研究への招待 3』 65-84.